

## 一般部門／絵画系

### 審査評

審査にあたっては絵と私たちのあいだに被膜があるという感じが拭えなかった。実見の場合ほど確信が持てないのだ。無論、画像を拡大したり、全体像に戻したりしながら、できるかぎり絵を把握するように努めた。もし技法や寸法の情報があれば、また、画像の質が一定であれば、被膜は若干薄くなったかもしれない。もしかすると、このもどかしさが、描写力のある堅実な絵を評価する傾向を促したのかもしれない。

県展の類にしては若い人の応募がそれなりにあり、WEB方式の意義も感じられた。応募作は千差万別。各審査員は2～0点で評価したが、得票した絵には、良くも悪くも、県展的なまとまりが現れた。入選作は県展の水準に近いのではないか。選別の意義とともに、審査することに対する疑問も感じざるをえなかった。

特選作のほとんどは三人の審査員が票を入れたもの。二人だけの票の絵も三点あったが、残り一人が認めていないわけではない。どの観点で評価するかである。評価の違いは絵の独自性に基づくことがあるので、意見が分かれることには意味がある。むしろ、議論すべき絵が増えることを望む。各特選作は、確かな技量により独自の世界を創り出している。実作を見たいと思った。

(兵庫県立美術館 学芸員 出原 均)